大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

マルグリット・ド・ヴァロワ『回想録』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006066

マルグリット・ド・ヴァロワ　『回想録』をめぐって

鍛　治　義　弘

初めに

一般には、アレクサンドル・デュマの小説や、パトリス・シェロー監督の映画によって、また日本では渡邊一夫の『戦国明暗二人妃』によっても、知られるマルゴ王妃こと、マルグリット・ド・ヴァロワ（1553年－1615年）は、ヴァロワ王家最後の王女であった。デュマやシェローらの提供する「マルゴ神話」においては、専らその美貌と奔放な恋愛生活に焦点が当てられるが、マルグリットは教養も高く、ネラックの宮廷やパリのサロンで詩人・文人を庇護し、また自らの生涯を綴った『回想録』の作者でもある。

マルグリットの生きた16世紀後半のフランスはユグノーとカトリック教徒が争い、そこに王権をめぐるヴァロワ家とブルボン家、さらにはギーズ家の対立が加わって、激しい内戦が断続的に継起する悲惨な時代であり、ナヴァール王アンリ（後のアンリ四世）と結婚させられたこの王女は、自らの結婚直後にサン＝バルテルミーの大虐殺を間近で体験し、また兄アンリ三世や夫のアンリ四世との対立から、ルーヴル宮やユソン城に幽閉されるなど、動乱に翻弄される生活を味わう。アンリ四世との婚姻解消が成立した後、ようやく許されてパリに帰還し、比較的平穏な晩年を迎え、王太子（後のルイ十三世）に財産を遺贈して、ヴァロワ家の最後として生涯を終える。

『回想録』はマルグリットがユソン城に蟄居して、王位についたアンリ四世からの結婚解消の提案がなされた頃に執筆が開始されたと思われるが、その直接的契機となったのはブラントームが綴った『貴顕婦人集』中の「マルグリット篇」である[1)]。ヴィエノの推定では、1593年頃この作品を送られたマルグリットは触発されてソネを作り、さらに『回想録』で述べるように、ブラントームの過ちを正す意味もあって自らの生涯を書き始めたらしい[2)]。1582年までの生涯で中断された『回想録』はその後打ち捨てられたようだが、既に17世紀の初めには写本の形で回覧されていて[3)]、今日17世紀の写本が６本残されている。マルグリットの死後1628年末に初めて出版されるが、同年に三回再版されるなどかなりの評判となり、17世紀末までに19版を数え、また1630年以降英語やイタリア語への翻訳がなされる。さらには、1678年には『回想録』のエピソードから着想を得て歴史小説が刊行され、また17世紀の回想録作者であるモンパ

---

1) Brantôme, <Discours sur la reyne de France et de Navarre, Marguerite , fille unique maintenant restée et seule de la noble maison de France> in *Recueil des Dames, poésies et tombeaux*, Gallimard, <Bibliothèque de la Pléiade>, 1991, pp.119-158.『貴顕婦人集』は1666年に初めて刊行されるが、シュレンクは「マルグリット篇」の起草を1591年—92年と推定している。(Gilbert Schrenck, <Brantôme et Marguerite de Valois : d'un genre l'autre ou les Mémoires incertains>, in *La cour au miroir des mémorialistes 1530-1682,* Klincksieck, 1991, p.184)

2) Éliane Viennot, *Marguerite de Valois Histoire d'une femme, histoire d'un mythe*, Payot, ©1993, pp.185-186.

3) グルネー嬢の証言があるとヴィエノは指摘している。Éliane Viennot, Introduction aux *Mémoires*, in Margurite de Valois, *Mémoires et autres écrits 1574-1614*, Champion, 1999, p.51.

ンシエ嬢も自らの作品の起草にあたってマルグリットの作品を読んだことを挙げる[4]など、影響は広範囲に渡っている。

さて、１人称で1559年から1582年までの生涯を、ほぼ年代順に語るこの作品には、いくつかの読みの方向が考えられよう。フランス王の娘、妹、さらには新たに王位に就く者の妻として、例えば、サン＝バルテルミーの大虐殺をルーヴル内部にいた「当事者」として身近に体験して記録しており、重要な政治的事件の歴史的証言として取り扱うこともできよう。またスパ温泉での丹毒治療を口実に行われたフランドル旅行の記述は、人々の気質、各町の様子などを報告する紀行文の性質をもち、異文化理解の様相を伝えるものでもある。しかしこの『回想録』は何より自己を語る作品、広義の自伝として読まれるのが相応しい。そのことをまずブラントームを対話の相手として『回想録』執筆の動機、経緯を語る導入部で確認しよう。マルグリットはまずブラントームの作品が余りに自分を褒めすぎだとした後、ランダン夫人の例を引いて、鏡に映った像が本人の思い描いていたものと違っていたことを述べ、友人たちの提示する像が正しいのか、と疑問を呈する。そしてブラントームに対して、自然・本性（Nature）については目撃者であるからさらなる情報を提供する必要はないが、運命（Fortune）に関しては報告によってしか書けず、しかもよく事情を知らずまた悪感情を持った人によって伝えられがちであるから、無知あるいは悪意により真実が表現されないとして、自ら思い出を提供しようと言う。こうしてブラントームの犯した誤りも訂正しようとする。ここには、歪められてしまっている、あるいは広く流布してしまった、自己像を自ら描き出そうとする意思が明瞭に読み取れる。それではマルグリットはどのような自己像を提示しようとしたのか。それを検討するのが本論文の狙いである。

子供時代

『回想録』本文の始まりで、マルグリットは人生にとって注目すべきことが起こった最初の時をシャルル九世の治下だとするが、このことを語る前に子供時代の逸話を二つ挙げる。もっとも、マルグリットにとって、子供時代は理性の光の届かない場所、人跡未踏の地帯であり、例えばルソーのように、そこに人格の起源を探ろうなどとはしない。子供時代に関して語られる事柄は、プルタルコスの『対比列伝』が伝えるテミストクレス（実際はアルキビアデスが正しい）やアレクサンドロス大王などの古代の偉人のように、後に明らかになる偉大な行為の予兆と見なされている。

第一の逸話は、1559年の父アンリ二世の悲劇的死に先立つ日々のことであり、父の膝の上でギーズの若殿ジョワンヴィル公とラ・ロシュ＝シュル＝ヨン公の息子のボープレオー侯爵（アンリ・ド・ブルボン）の間で、どちらを侍者として選ぶかと尋ねられたマルグリットが、美しさでは劣るアンリ・ド・ブルボンを選んだという話である。（美しくない方が「ボー」であり、またラ・ロシュ＝シュル＝ヨン公の息子であり、アンリであることにも留意したい）。不審に

[4] *Ibid.*, p.62.

思う父に娘は「ブルボンの方が賢明だし、もう一人は我慢が出来なくて、いつも人に悪さをするし、いつも主人でいたがるから」[5]と答える。そしてそれ以降起こったことからした確かな予兆であったとしてこの逸話を終える。それではこれはいかなることの予兆であるのか。それはマルグリットが旧教同盟を主導したアンリ・ド・ギーズを中心とするギーズ一党ではなく、結婚することになるアンリ・ド・ナヴァールの属するブルボン家を選ぶことになったことの予兆であり、さらにはその選択が美より賢明さを基準にしていたと言うことでもあり、マルグリットは自分の賢明さ、選択の正当性を、最初の逸話から印象づけようとする。

第二の逸話は1561年のポワシー会談の頃のものである。当時宮中でもユグノーの影響力が強まり、中でもアンジュー公（後のアンリ三世）は八歳の妹に改宗を迫り、時禱書を燃やし、詩篇歌やユグノーの祈禱集を与えるが、トゥルノン枢機卿の助けもあって、カトリックに留まったとするものである。この話が予告するのは自身のカトリックへの忠誠であり、やがてポーでの事件の折に明瞭に現れるだろう。と同時に兄アンリ三世の定見のなさ、悪辣さも予め指摘されている。

この二つの逸話の後マルグリットは1564年に始まるフランス大巡幸の話を語るが、そこでは祝宴の描写が大きく挿入される。1565年6月23日アドゥール川のエグモー島で行われた、スペイン王フェリペ二世に嫁していた姉エリザベートとの再会を祝して母カトリーヌ・ド・メディシスが催す祝宴の模様が詳しく語られるのだ。豪華な衣装で牧人に仮装した者に給仕され、海神に扮した者たちが歌い詩句を朗誦し、各地方の楽器とダンスを伴った祝宴は、後に語られるフランドル旅行での祝宴の描写を予示しており、豪奢さ、芸術・文化性を示唆し、『回想録』では余り発展させられないが、ルーヴル幽閉中の読書などを予告するものであろうか。また栄光を妬む運命の女神によって、この祝宴は、奇妙な雨となり、引き上げるのが大混乱に陥ったと述べて締めくくるのも、自身の身の浮沈を予め知らせるものであろう。

こうして子供時代の二つの逸話と祝宴の描写は、マルグリットによって、後の出来事を予め告げるものとして提示されるのである。これに引き続いて子供時代から青春期への移行を示す出来事が起こるが、それはもう大人の世界である。

ヴァロワ王家内での争い

マルグリットにとって決定的とも言える転機は1569年夏、16歳の時に起こる。兄アンジュー公アンリは1568年11月のジャズヌイユの戦と1569年3月のジャルナックの戦で勝利を収め、ユグノー軍を追い詰め、王と母后を戦場に招き、カトリーヌはマルグリットを同行させる。プレシ＝ラ＝トゥールで、母后たちが公園を散歩する間に、二人きりになったアンジュー公はマルグリットの助力を求める。今や子供時代は終わり、マルグリットの才気、判断力、忠誠を買っ

---

[5] <<Pour ce qu'il était plus sage, et que l'autre ne peut durer en sa patience qu'il ne fasse toujours mal à quelqu'un, et veut toujours être le maître.>> Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits 1574-1614*, Édtition critique par Éliane Viennot, Champion, 1999,p.74.本論での『回想録』への引用、参照はすべてこの版による。

て、自分が母后から離れている間、母后の傍らを離れず、自分の立場を擁護して欲しいのというのだ。アンジュー公アンリの「第二の自己」<<second moi-même>>としてである。直接話法で再現されるこの提案にマルグリットは衝撃を受ける。

「この言葉は私にはとても新鮮でした。その時までこれといった目論見もなく生きていて、踊ったり狩に行くことしか考えず、着飾ったり美しくみせる心遣いさえありませんでした。またそのような望みを抱く年でもなく、母后の傍でとても大きな不安を抱いて育てられ、母后に思い切って話すことができないだけでなく、私をご覧になる時には、何か気に入らないことをしたのではないかと思って、身がすくんだからです。モーセが燃える柴の幻影を見て答えたように、『私は何者でしょう。あなたがおつかわしになるべき人をおつかわしください』と、私はもう少しでアンジュー公に答えるところでした。しかし（私は十分勇敢に生まれついていたが、以前には知られず、アンジュー公の言葉の目的によって掻き立てられた力の）私のうちにあった私の考え及ばなかったものを見出し、この最初の驚きから我に返り、私はこの言葉が気に入りました。そしてすぐに私は変わり、それまでの私以上の何かになったと思われました。私は自分に自信を持ち始め、公に言いました。『お兄様、あなたが私に望んでいることであなたの役に立つ意思を持っているので、神様が私に母后に話す能力と大胆さをお与えになるなら、あなたが申し出た有用性と満足をあなたはきっと引き出すでしょう。服従については、私はそのようにいたしますので、私が世のいかなる楽しみよりもあなたの利益を選ぶことが分るでしょう。あなたが私を信頼するのは正しいことです。というのも私以上にあなたを尊敬し愛する者はこの世には何もないのですから。それを当てにしてください。私が母后の傍にいれば、あなた自身がそこにいることですし、私はあなたのためだけにそこにいますから』」。[6]

兄に能力を認められ、自己の潜在能力に目覚めたマルグリットは、自己の変化を意識し、過去の不安を拭い去り自信に満ち、子供らしさから成長して積極性を身に着けて、新たな世界、新たな努めに乗り出す。それは母后の傍で兄の代理を果たすと言う政治の世界に関与すること

---

[6] <<Ce langage me fut fort nouveau, pour avoir jusques alors vécu sans dessein, ne pensant qu'à danser ou aller à la chasse, n'ayant même la curiosité de m'habiller ni de paraître belle, pour n'être encore en l'âge de telle ambition, et avoir été nourrie avec telle crainte auprès de la reine ma mère que, non seulement je ne lui osais parler, mais quand elle me regardait je transissais, de peur d'avoir fait chose qui lui déplût. Peu s'en fallu que je ne lui répondisse, comme Moïse à Dieu en la vision du buisson : <<Que suis-je, moi ? Envoie celui que tu dois envoyer.>> Toutefois, trouvant en moi ce que je ne pensais qui y fût (des puissances excitées par l'objet de ses paroles, qui auparavant m'étaient inconnues, bien que [je fusse] née avec assez de courage en moi), revenue de ce premier étonnement, ces paroles me plurent ; et me semblait à l'instant que j'étais transformée, et que j'étais devenue quelque chose de plus que je n'avais été jusques alors. Je commençai à prendre confiance de moi-même, et lui dis: << Mon frère, si Dieu me donne la capacité et l'hardiesse de parler à la reine ma mère, comme j'ai la volonté de vous servir en ce que désirez de moi, ne doutez point que vous n'en retiriez l'utilité et le contentement que vous vous en êtes proposé. Pour la sujétion, je la lui rendrai telle, que vous connaîtrez que je préfère votre bien à tous les plaisirs du monde. Vous avez raison de vous assurer de moi, car rien au monde ne vous honore et aime que moi. Faites-en état, et qu'étant auprès de la reine ma mère vous y serez vous-même, et que je n'y serai que pour vous.>> >>
Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits*, pp.82-83.

を意味した。上記引用箇所では、『出エジプト記』第三章11節と第四章13節の言葉を用いて、神からエジプト脱出の命を受けるモーセに自らを擬えて、兄の提案を大きな使命として受け止めたことが示される[7]。しかしアンジュー公の提案は政治的役割を果たすことではあっても、あくまでも公の第二の自己<second moi>になること、補助的役割を果たすことに過ぎず、主体として振舞うことではないが、マルグリットはこれに気付いていたのだろうか。ともかくアンジュー公から経緯を聞かされたカトリーヌもマルグリットを子供扱いすることはなくなり、母后の傍らで話を聞くことになったとされる。

しかしこうした幸福は長く続かない。既に1569年サン＝ジャン＝ダンジェリ攻囲戦で再会した折にはアンジュー公の態度は変わっている。

「しかし出立してから、アンジュー公は傍にデュ・ガを置き、すっかりこの者に取り付かれ、この者の目だけで見、この者の口でだけ話しました。この悪人は、悪をなすために生まれ、突然王の精神を魅了し、多くの暴君的格言で満たしました。『自分以外を愛し信じるべきでない』、『自分の運命にだれも加えるべきでない、弟でも妹でも』。そしてマキャベリ的なご立派な他の掟です。アンジュー公はこれらを精神に刻み、それを実行しようと決意し、私たちが到着するや、最初の挨拶の後、母后が私を褒め、自分の傍らでいかほど忠実に私が公の役に立ったかを言い始めると、公は、それを頼んでおいたので、うまくいってくれてうれしい、と冷たく答えました。しかし慎重になれば同じ方策をいつでも用いることはできないし、『あるときに必要な者は別の時には邪魔になりうる』、と言いました。母后はなぜそのようなことを言うのかと尋ねます。この件で、アンジュー公は私を損なう時が来たと見て、母后に、私は美しくなった、ギーズ公が私を求めていて、ギーズ公の叔父たちは私をギーズ公と結婚させたがっているのを知っている、私がギーズ公に愛情を抱くようになれば、母上が私にいうことをすべてギーズ公に暴露するやも知れず、母上もこの家系の野望を、どれほど私たちの家系に対立してきたかもご存知で、この際私に公事はもはや話さず、私と親しくするのも避けられるほうがよいでしょう、と言いました」。[8]

---

[7] ヴィエノは『回想録』でマルグリットが自らを擬える人物を考慮して、マルグリットは自らを女性として表現していないとする。マルグリットが自らを譬えるのはすべてが男性ではなく、アンリ四世を想起させて自らをローマ女性に擬えることもあるが、ヴィエノの指摘は大変興味深い。Éliane Viennot, <Les ambiguïtés identitaires du *Je* dans les Mémoires de Marguerite de Valois>, in *Le genre de Mémoires Essais de définition*, Klincksieck, 1995, p.71.

[8] <<Mais depuis qu'il était parti, il avait proche de lui Le Guast, duquel il était tellement possédé qu'il ne voyait que par ses yeux et ne parlait que par sa bouche. Ce mauvais homme, né pour mal faire, soudain fascina son esprit, le remplit de mille tyranniques maximes : qu'*il ne fallait aimer ni fier qu'à soi-même,* qu'*il ne fallait joindre personne à sa fortune, non pas même ni frère ni sœur,* et autres tels beaux préceptes machiavélistes ... Lesquels imprimant en son esprit, et résolvant les partiquer, soudain que nous fûmes arrivées, après les premières salutations ma mère commença à se louer de moi et lui dire combien fidèlement je l'avais servi auprès d'elle, il lui répondit froidement qu'il était bien aise qu'il lui eût bien réussi, l'en ayant supplié ; mais que la prudence ne permettait pas que l'on se pût servir de mêmes expédients en tout temps, que *qui était nécessaire à une certaine heure pourrait être nuisible à une autre.* Elle lui demanda pourquoi il disait cela. Sur ce sujet, lui, voyant [venu] le temps de l'invention qu'il avait fabriquée pour me ruiner, lui dit que je devenais belle, et qu'il savait que Monsieur de Guise me voulait rechercher, et que ses oncles aspiraient à me le faire épouser ; que si je venais à y avoir de l'affection,

アンジュー公アンリは、ギーズ公の求愛により、マルグリットが裏切る可能性があるとして、母后に妹にもう公事を話さぬよう求めているが、ここにはマルグリットを他の女性同様にみて、その弱さを非難する姿勢がある。この豹変がもとで、マルグリットは病になるが、妹は見舞うアンジュー公の態度を本心を隠すものだととるほど、両者の関係は冷え込む。その後ポーランド王に選ばれたアンリはフランスを発つ前にはマルグリットとの関係を修復しようとするが、シャルル九世の死を受けて急遽帰国すると元の態度に戻っていた。母后とリヨンに迎えに行ったマルグリットはそれを痛感させられる。

こうして今やフランス王アンリ三世となった兄との関係は、一時多少の改善は見られるが、悪いまま続く。マルグリットに言わせれば、これはデュ・ガらに示唆された王が、弟とアンリ・ド・ナヴァールの結びつきを絶とうし、妹を二人を結びつける絆、マルグリット自身の表現では切断された部分を結び付けるバルサム膏、であると考えためである。マルグリットは、アンリ三世を、妬み深く、怒りやすく、人に操られやすい人物として描き出すが、そうした視線の根本には王から受けたひどい仕打ちに対する癒し難い思いがある。なかでも王妃に耐え難いのは無礼侮辱<indignité>の感情である。自分の侍女であるトリニーを取りあげられたとき、またナヴァール王との緊張が高まりいわば捕囚としてルーヴルに拘束されたときに感じるこの感情は、自らの王女、王妃としての誇りある立場を踏みにじられた悔しさに因るのであろう。マルグリットはこのように兄を非難するものの、その原因を、悪をなすために生まれてきた悪人で、神の審判で殺され、死んで魂を悪魔に与えられたとまで言う、デュ・ガや、寵臣のモジロンらに負わせ、ことの成り行きは「運命」に帰している。

アンリ三世は確かにマルグリットに過酷な態度を取ったかもしれないが、王の側から見れば当然と思われる節もあり、マルグリット自身もそれを目立たぬように述べていた。ポーランド王に選ばれたアンリがフランスを離れ、1573年夏シャルル九世の病が進行すると、次の王位をめぐって幾度か陰謀が企てられる。1573年12月のスワソンの企てと思しき事件の折には、マルグリットはミオサンから情報を得て、これを王に通報してことを未然に防いだと述べるが、その後態度を変える。

「それが過ぎて、私たちはサン=ジェルマン=アン＝レに到着するが、王の病気のためにそこで長逗留となりました。この時に、弟のアランソン公は、私がシャルル王になしたように、私が公に友情を誓うために、あらゆる口説き手立てを用いて、私の意にかなうようにしました。というのも、その時まで、公はいつも宮廷外で養育されていたので、相見たことがほとんどなく、あまり親しみを持っていなかったからです。とうとう、公が私に証する従属・服従と愛情に誘われて、私は公を愛し、公に関することを受け入れることに決めたが、よき兄シャルル王に負うていることを害さないという条件においてであり、私は王を何事でも尊敬していました。

---

qu'il serait à craindre que je lui découvrisse tout ce qu'elle me dirait ; qu'elle savait l'ambition de cette Maison-là, et combien elle avait toujours traversé la nôtre ; [que] pour cette occasion il serait bon qu'elle ne me parlât plus d'affaires, et que peu à peu elle se retirât de se familiariser avec moi.>>
Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits*, pp.84-85.

王は私にこの好意を続け、最後までそれを示しました」。[9]

マルグリットの書きぶりでは、この決意を1574年2月のサン＝ジェルマンの恐怖の前後、いずれに位置づけるか困難ではあるが、ともかくはっきりとアランソン公側に加担しており、アランソン公とアンリ・ド・ナヴァールがヴァンセンヌに拘留された時には、自らの馬車で二人のうち一方を女装させて脱出させることまで考えている。こうしたいわばアランソン公に乗り換えたマルグリットの態度はアンリ三世からすれば立派な裏切りとなろう。

マルグリットは、弟を、兄とは異なり、勇敢、慎重、独立心に富む人間として描き出すが、その背後には、同じように兄に押さえつけられる境遇にいて、同じように兄王や寵臣の無礼侮辱に耐えねばならないいわば同士的感情があるのだろう。それ故姉は従属し服従を誓う弟の二度のルーヴル脱出に関与し、中でも二度目はマルグルットの部屋からロープで脱出させるに至り、二人は異常なまでの親しみを見せる。しかし二人の関係は家庭内での愛情にのみ留まるものではない。姉はいわば後ろ盾保護者として、弟がフランドルで統治者となる企てを助ける。その輝かしい成果がマルグリットのフランドル旅行である。

フランドルへの旅

1576年12月のブロワの全国三部会を受けて、アンリ三世はユグノーへの宣戦を布告し、第六次宗教戦争が始まる。兄アンリ三世と夫アンリ・ド・ナヴァールの板ばさみになって困惑するマルグリットに、フランドルにおけるフランス王代官モンドゥセが、腕に出来た丹毒を口実に、スパ温泉での治療の旅を勧め、戦争の間フランスを離れるためにフランドルを旅する。マルグリットは1577年6月パリを発ち、カンブレからフランドルに入り、モンス、ナミュールを経てリエージュに至り、そこにスパの温泉を運ばせる形で半月ほど滞在し、ディナン、フルリヌを通ってル・カトレの自領に同年9月13日に戻る。

『回想録』の伝えるこの旅行の行程は、いわばリエージュを中心折り返しにして、対照的な構成をとる。モンスではララン伯夫妻に歓迎され、後に詳しく見るように夫人から好意的扱いを受ける。ナミュールではスペインのフランドル総督のドン・ファン・ドトリッシュは、ムーズ川の島で、エグモー島を思わせる祝宴を催すが、やはり妬み深い「運命」は幸福を続けさせず、思わぬ洪水に会い、またトゥルノン嬢が急な発作に襲われ、リエージュ到着後一命を落とす。マルグリットの通過後情勢が緊迫し、帰りのディナンは町役人の選挙で祝いの雰囲気では

---

[9] <<Cela étant passé, nous arrivâmes à Saint-Germain, où nous fîmes un grand séjour à cause de la maladie du roi ; durant lequel temps, mon frère d'Alençon employait toutes sortes de recherches et moyens pour se rendre agéable à moi, afin que je lui vouasse amitié, comme j'avais fait au roi Charles. Car, jusques alors, pour ce qu'il avait toujours été nourri hors de la Cour, nous ne nous étions pas guères vus, et n'avions pas grande familiarité. Enfin, m'y voyant conviée par tant de submissions et de sujétion et d'affection qu'il me témoignait, je me résolus de l'aimer et embrasser ce qui lui concernerait, mais toutefois avec telle condition que ce serait sans préjudice de ce que je devais au roi Charles mon bon frère, que j'honorais sur toutes choses. Il me continua cette bienveillance, me l'ayant témoignée jusques à sa fin.>>
Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits*, p.103.

あったが、当初市民はマルグリットを受け入れず、ドン・ファンの軍勢が迫る。さらにドン・ファンの軍勢に追われて、ようやく辿り着いたフルリヌの城主夫人はつれない対応をし城を閉ざして一行を外に置き、ようやく城主が戻り城中に避難できた。こうした旅の経過は偶然と思えぬほどの対照的な出来事として描かれる。ほぼ中ほどを占めているこの旅行の部分に、『回想録』全体の構成を認めることも可能かもしれない。

この旅は単なる湯治目的でも、勿論物見遊山でもなかった。マルグリット自身が述べるように、当時フランドルを含む低地地方は微妙な状態に置かれていた。北部はオラニエ公ギレムを盟主にプロテスタントが独立を求め、カトリックの南部は1576年11月のヘント条約で北部と同盟しスペインに対抗するが、スペインは南北分離を図って支配を継続しようとしていた。こうした情勢下でフランドルの都市の中にはフランスを頼り、アランソン公を自分たちの盟主に担ごうと思うものもいたのである。マルグリットの旅はこうした情勢を探り、味方となりそうな者たちと連絡をとるという極めて政治的な意味を帯びていた。そして実際マルグリットは、カンブレでは町並みに加えて要塞にも注目し、要塞司令官インチイがフランスよりであることを見通し、モンスでは領主ララン伯夫人の親フランスの意を汲んで、アランソン公をフランドルの君主として推す。

「しかし弟のアランソン公殿は、長所、慎重さ、善良さで、父王や兄王たちに何も負わず、この企てに進んで同意するでしょう。そしてあなた方を助けるのに兄のフランス王に負けず劣らず手立てがあるでしょう。弟は軍事に向けて育てられ、私たちの時代の最も優れた大将の一人と評価されていて、今はユグノーに対する王軍の司令官ですらあり、その軍を率いて、私が出立して以来、ユグノーたちに対して、イソワールという非常に強固な町と、他のいくつかの町を奪取しました。すぐ隣にいて、この戦に必要な方策設備を引き出すことのできるフランスという偉大な王国に献身していて、あなた方に救援がより有効であるような君主を招くことはできないでしょう。そして弟があなたの夫の伯爵殿のこの善き務めを引き受ければ、弟の望む地位の分配にあなた方はきっと与ることができます。弟は性温和で、恩知らずではなく、受けた奉仕あるいは親切な行いを認めることだけを喜ぶのですから。弟は名誉ある価値のある人々を称賛し愛しみます。それゆえフランスの最高の人々に従われています。間もなくフランスでユグノーとの和平が交渉され、私がフランスに戻ったら和平がなされているのを目にすることができると思います。あなたの夫の伯爵殿がこの点であなたと同じ意見で同じ意思なら、私が弟をそれに仕向けたいのかよくお考えなるように。私は、この地方、そして特にあなたの家門がそれでこよなき幸福をきっと受けられると思います。弟があなた方のおかげでここに身を立てるなら、あなた方は私としばしば会うと思うことができましょう。私たちの友情はこのようなのですから、兄と妹でも、決してこれほど申し分なくはなかったでしょう。」[10]

---

[10] << Mais mon frère, Monsieur d'Alençon, qui ne doit rien en valeur, prudence et bonté, aux rois mes père et frères, entendrait bien à cette entrprise, et n'aurait moins de moyens que le roi de France mon frère de vous y secourir. Il est nourri aux armes et estimé un des meilleurs capitaines de notre temps, étant même à cette heure

アランソン公のフランドル戦への参加の意思を匂わせ、公の軍事的能力、実績を指摘し、強国フランスの後ろ盾を示唆し、協力者への報償を約束する、実に見事な説得の言葉であり、マルグリットの政治外交的能力を示すものと言えよう。またマルグリットはララン伯夫人が夫に大きな影響力を持つことを見抜き、またララン伯が夫アンリ・ド・ナヴァールの親族であることも利用して、まずは伯夫人と友情を結び、夫人に親フランスの思いを打ち明けさせて後に、アランソン公を推すという、優れた交際交渉術を見せている。翌日夫人からマルグリットの意を聞いたララン伯と、アランソン公を君主に据える協議が行われ、さらにマルグリットがフランスに戻ると、ララン伯からの使者がラ・フェールに滞在するマルグリットとアランソン公の元に到着し、計画が取り決められる。

フランドル旅行はマルグリットが政治外交的能力を発揮し成功を収めたハイライトであった。こうして、自ら先頭に立つことができなくても、まだ女性が政治的能力を揮い得たことを『回想録』のこの箇所では述べているのだ。

アンリ四世との関係

マルグリットはシャルル九世王、アンリ三世王の妹、アランソン公フランソワの姉であり、このヴァロワ家内部での争いに関ったことはこれまで見たとおりである。しかしまた同時にナヴァール王アンリの妻であり、自身はカトリックでありながらこのユグノーの頭と結婚したことは、その立場を一層複雑なものとしている。当時の王侯の結婚の常としてこの結婚が当人の意志に基づくものではなく、政治的配慮によることは当然であり、マルグリット自身もこの結婚話が持ち上がったとき、自身のカトリックとしての立場からカトリックでない者との結婚は辛いが、母后カトリーヌ・ド・メディシスの意向如何であることを『回想録』でも述べていた。周知の通り、結婚式に引き続くサン＝バルテルミーの大虐殺によりアンリ・ド・ナヴァールはルーヴルに囚われの身となり、カトリックに改宗することでようやく命を保った。大虐殺の折にも夫の部下たちの命を助けたことをマルグリットは記すが、その後離縁が企てられた際にはこれを拒む。さらにアランソン公ともども不平党の謀反に加わった罪で夫がヴァンセンヌに投獄されると、1574年4月夫に代わって弁論書を書いている。夫が恐らく性的消耗によって人事不省に陥った時には、義務から夫を看護する。弟アランソン公とナヴァール王の同盟を慮っ

---

commandant l'armée du roi contre les huguenots, avec laquelle il a pris, depuis que je suis partie, sur eux, une très forte ville nommée Issoire, et quelques autres. Vous ne sauriez appeler prince de qui le secours vous soit utile, pour vous être si voisin, et avoir si grand rauyaume que celui de France à sa dévotion, duquel il peut tirer et moyens et toutes commodités nécessaires à cette guerre. Et s'il recevait ce bon office de Monsieur le comte votre mari, vous vous pouvez assurer qu'il aurait telle part à sa fortune qu'il voudrait, mon frère étant d'un naturel doux, non ingrat, qui ne se plaît qu'à reconnaître un service ou un bon office reçu. Il honore et chérit les gens d'honneur et de valeur, aussi est-il suivi de tout ce qui est de meilleur en France. Je crois que l'on traitera bientôt d'une paix en France avec les huguenots, et qu'à mon retour en France je la pourrai trouver faite. Si Monsieur le comte votre mari est en ceci de même opinion que vous et de même volonté, qu'il avise s'il veut que j'y dispose mon frère, et je m'assure que ce pays, et votre Maison en particulier, en recevra toute félicité. Si mon frère s'établissait par votre moyen ici, vous pourriez croire que vous m'y trouveriez souvent, étant notre amitié telle qu'il n'y en eût jamais, de frère à sœur, si parfait.>>
Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits*, pp.150-151.

てでもあろうが、弟とナヴァール王のルーヴル脱出計画を弟から告げられて、自身の危険を顧みずこれを見逃す。このように夫がフランス宮中にいる間はいわば保護者としてアンリ・ド・ナヴァールに寄り添っていた。これに対して夫は必ずしもマルグリットの思いに答えず、1575年のトリニー事件で夫がフランス王の意向に沿ったために別々のベッドに寝るようになり、またアランソン公がルーヴルから逃れて後マルグリットが肉体精神を病んでも、自身も脱出を決め、宮中での残りの時間を恋するソーヴ夫人を追うのに忙しい夫は妻を見舞うこともなく、1576年2月別れも言わずに出立する。しかしこうした夫の態度にマルグリットは兄に対するほどは怒りを表現しない。

二人の関係はナヴァール王がフランス宮廷から逃れ、ユグノーに再改宗し、南仏に勢力を築いて、フランス王権、カトリック勢力と対立するようになると変化していく。第六次宗教戦争の終結となる1577年ベルジュラックの和議の後、1578年10月南仏でカトリーヌともどもようやく夫と再会する。事件は1579年6月戻っていたベアルヌのポーで起こる。カトリックが禁止されていたこの町ではマルグリットたちは城の小さな付属礼拝堂でだけミサをあげることができたが、そこにポーのカトリック教徒が忍び込み聖祭に参加したのである。ユグノーたちに発見されたこのカトリック教徒たちは捕らえられ、ル・パンなる者の命で、マルグリットの面前で殴られ、牢獄へと引き立てられる。この事態にマルグリットは無礼侮辱<indignité>を感じるのである。面前でこのようなことが行われるとは、王妃として、またカトリック教徒として、自らの立場を損なうと感じたからであろう。怒ったマルグリットがル・パンの追放を訴えるのに対して、夫王は一度は認めるが、結局決着を見ず、マルグリットはポーを去り、大部分をネラックに過ごすことになる。この後オーズという小村でアンリ・ド・ナヴァールが大病に陥った際には再び看病し夫が感謝し、ネラックではナヴァール王の妹カトリーヌともどもすばらしい宮廷を営み、カトリックとユグノーが共存したと述べるのだが、この事件で示された二人の力関係はもう戻らない。

1579年第７次宗教戦争が始まりユグノー勢が苦戦する中、カトリックとユグノーの間で思い悩みつつも、夫に賭けたとするマルグリットは、義務と夫が示す友情信頼から、フランス王と母后に、南仏の状況を書き送る。ビロン元帥にネラックを砲撃されるほど戦況はナヴァール王に不利であったが、フランドルでのスペインの攻勢に晒されたアランソン公の仲裁で、1580年フレクスの和議が結ばれる。しかしマルグルットの侍女であるフォスーズをめぐってナヴァール王とアランソン公の恋の鞘当が起きてしまったため、二人のかつての同盟関係は修復されず、ナヴァール王の嫉妬を除こうとフォスーズが身を許してしまい、妊娠する事態にまで至る。侍女の妊娠をごまかすために温泉に連れて行くことを夫に強いられ、また援助を申し出たのにこの娘に拒絶され、とうとう城中で出産となると手助けをまた夫に要求され、あまつさえ死産したフォスーズの見舞いまでを強要され、これまでのマルグリットでは考えられないような無礼屈辱を受ける。しかし自分の命令に従わないといって激しく立腹する夫が不快だとマルグリットはもはや言うだけである。

恋愛生活

マルグリットは夫アンリ・ド・ナヴァールの恋については、ソーヴ夫人、デイエル、ルブール、フォスーズと具体的に名前を挙げて言及する。しかしそれが政治的な問題の原因となるか自分の名誉評判に関係しなければ、特に非難する訳ではない。そして自らの恋愛についてはほぼ語らない。こうして特に女性の愛情面を語らないというのは、当時の礼節に因るものだとヴィエノはする[11]。しかし生前から奔放な恋愛生活が話題となり、愛人との間にできた子供の出産まで噂となったマルグリット[12]は、単にこうした面を語らないだけであろうか。『回想録』ではより進んだ戦略が取られている。

新王となったアンリ三世を迎えにいった時の記述に、一見奇妙な逸話が挿入される。年代日付が書かれることはほぼないものの、ほぼ年代順に出来事が語られる中に、時代を遡って、1559年のアンリ二世と1569年のジャルナックの戦の勝利についてのカトリーヌの予知夢の話が挿入されるのだ。しかも神が偉大な精神に出来事の秘密の警告を与えるとの前置きをしてからである。この二つの予知夢に続いて、マルグリットは自身がアンリ三世を前にして感じた戦慄を述べる。そしてその後に自分の愛人関係についてデュ・ガから受けた「中傷」の話を置く。すなわち1574年のリヨンではアントラーグとの関係を、アンリ三世はアンリ四世とカトリーヌに告げるが、結局は密会の場とされたところに同行した者たちの証言で、事なきを得る。マルグリットはこれを、アランソン公とアンリ四世を裂くデュ・ガの計略によるとする。さらにパリに戻ると、デュ・ガが、ビュッシーとの仲をアンリ四世、アンリ三世に告発し、またもやアンリ三世はカトリーヌに告げる。これに対して母后の反応は以下のようである。

「デュ・ガによりそれがしみ込んだ王は母后に話し、母后がナヴァール王に話すよう勧め、母后をリヨンのときと同じく手厳しくさせようとします。しかし母后は、そこにほとんど理がないのを見て、拒絶し、王に言います。『あなたにこんな意見を思いつかせたのがどんないざこざを起こす人かは知りません。娘はこんな時代に生まれてかわいそうです。私たちの時代には、だれとでも自由に話しましたし、あなたの父王に従うすべての紳士、あなたの叔父の王太子殿、オルレアン殿は、通常あなたの叔母のマルグリットの奥方と私の寝室におられました。だれもそれを変だと思わず、何もありませんでした。ビュッシーはあなたの前で、娘の寝室で夫の前で、夫の部下たち全員の前で、みんなの前で娘に会います。こっそりとでもドアを閉じてでもありません。ビュッシーは優れた者で、あなたの弟の手の者で第一の者です。何を考えることがあるのでしょう。何か他のことを知っているのですか。リヨンで、中傷により、あなたは私に娘をひどく辱めさせました。娘が一生恨みに思うでのはないかと心配です』。王は驚いたまま母后に言います。『母上、私は他の者が言うことを言っているに過ぎません』。母后は答える。『息子よ、その他の者とは誰です。その者たちはあなたの家族全員を折り合い悪くさ

---

[11] Éliane Viennot, Introduction aux *Mémoires*, in *Margurite* de Valois, *Mémoires et autres écrits 1574-1614*, Champion, 1999, pp.28-29.
[12] Robert Muchembled, *Passions de femmes au temps de la reine Margot*, Seuil, 2003, p.36, p.37.

せようとしているのです』。王が立ち去ると、母后は一切を私に語り言います。『お前は惨めな時に生まれた』。そしてあなたの叔母ダンピエール夫人を呼び、かつての時代にあった誠実な自由と楽しみについて話し始めたが、私たちのように悪口とはならなかったのです」[13]。

カトリーヌの予知夢で始まったこの「中傷」の話は、カトリーヌの嘆きで終わる。偉大な精神カトリーヌは神から出来事の秘密の予言を受けた。マルグリットの戦慄も自らの不幸を予言するものであったとされるのだ。カトリーヌとアンリ三世のやりとりを直接話法で再現して、さらにはブラントームの叔母までをも証人に引っ張り出して、ビュッシーとの関係を正当化しようとする。中傷を行う者は勿論悪人であり、デュ・ガはトリニーを殺害しようとまでしたと語り、その悪辣さを強調するのも忘れはしない。またマルグリットは、自分の恋愛に対する中傷をアンリ三世とアランソン公、アンリ四世の対立という政治的面に置き、専らその面で論じている。

終わりに

『回想録』でマルグリットが描き出そうとした自己像は、自らの判断力、才気を頼み、アランソン公とアンリ四世を結び付けて政治的に活動しようとする姿であり、恋愛や女性であることを隠そうとしているように見える。またカトリックの擁護者であることも強調されるが、ユグノーにも宥和的であることも語られる。こうした政治的活動は、アランソン公のフランドルの企てでは成果を挙げるが、アンリ三世の迫害を受け、アンリ四世の身勝手にも手を焼き、それでも男たちに伍して時代を生きていく。自分の教養や美貌についてはほとんど言及がなく、愛人については専ら迫害者の中傷であるとし、またその動機を政治的なものとする。こうして生きていく中で兄王や夫王から自らの誇りを傷つけられる無礼侮辱を受けることもしばしばであった。それによく耐え、抵抗してきたが、フォスーズ事件では、結局アンリ四世の前に屈服せざるを得なくなったように思われる。マルグリット自身も1582年6月12日付けと推定されるアンリ・ド・ナヴァール宛て書簡で、国事に関する自分の無力を告白するに至っているのだか

---

13) <<Par Le Guast le roi imbu de cela en parle à la reine ma mère, la conviant à en parler au roi mon mari, et tâchant de la mettre aux mêmes aigreurs qu'il l'avait mise à Lyon. Mais elle, voyant le peu d'apparence qu'il y avait, l'en rejeta, lui disant : <<Je ne sais qui sont les brouillons qui vous mettent telles opinions en la fantaisie. Ma fille est malheureuse d'être venue en un tel siècle. De notre temps, nous parlions librement à tout le monde, et tous les honnêtes gens qui suivaient le roi votre père, Monsieur le dauphin et Mosieur d'Orléans vos oncles, étaient d'ordinaire à la chambre de Madame Marguerite votre tante, et de moi. Personne ne le trouvait étrange, comme aussi n'y avait-il pas de quoi. Bussy voit ma fille devant vous, devant son mari en sa chambre, devant tous les gens de son mari, et devant tout le monde ; ce n'est pas à cachette ni à porte fermée. Bussy est personne de qualité, et le premier auprès de votre frère. Qu'y a-t-il à penser? En savez vous autre chose ? Par une calomnie, à Lyon, vous me lui avez fait faire un affront très grand, duquel je crains bien qu'elle ne s'en ressente toute sa vie.>> Le roi demeurant étonné lui dit: <<Madame, je n'en parle qu'après les autres.>> Elle répondit: <<Qui sont ces autres, mon fils ? Ce sont gens qui vous veulent mettre mal avec tous les vôtres.>> Le roi s'en étant allé, elle me raconte le tout et me dit : <<Vous êtes née d'un misérable temps.>> Et appelant votre tante Madame de Dampierre, elle se mit à discourir avec elle de l'honnête liberté et des plaisirs qu'ils avaient en ce temps-là, sans être sujets comme nous à la médisance.>>
Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits*, pp.117-118.

ら。

「私は自分の無力を知っており、私の熱意では補えないでしょう。国事では私のような無知で愚かな女は多くの誤りを犯しうることも分ります」。[14)]

こうしていわば「雄雄しい」姿を最早見せることが困難となったマルグリットが1582年フランスへ戻るところで、『回想録』を中断しているのは、この後の生涯を少しでも知っていれば、むしろ当然のことと考えられる。アランソン公のフランドルでの企ては1581年のネーデルランド連邦共和国の独立もあり、失敗に帰す。シャンバロンとの恋は1582年５月頃からの書簡が残されていて隠しようもない。さらにはアンリ三世に追われ、アンリ四世と疎遠になり1586年からユソン城に軟禁状態となり、一時はあの旧教同盟に加担した。

最早マルグリットには政治の出番も、アンリ四世の妻の地位もないのである。

（2011. 12. 9）

14) << Je congnois bien mon incapatité, a quoi mon bon zele ne saroit ases supléer, et sai quan afferes dEstat une femme ingorante et sotte comme moy i peut fere beaucoup daireurs.>> Marguerite de Valois, *Correspondance 1569-1614,* Edition critique par Éliane Viennot, Champion, 1998, p.224.

Sur les *Mémoires* de Marguerite de Valois

Yoshihiro Kaji

Marguerite de Valois, généralement connue comme <Reine Margot> du roman de Dumas ou du film de Patrice Chéreau, est la dernière des Valois et la première épouse d'Henri IV de Bourbon. Le mythe <Margot> qui s'est produit de son vivant met l'accent sur la beauté et la vie amoureuse de cette princesse. Mais elle était assez intelligente pour faire admirer ses humanités par l'éveque de Cracovie. Elle est aussi l'auteur des *Mémoires* qui racontent sa vie jusqu'en 1582. Par cette œuvre elle cherche à représenter l'image de sa propre existence en corrigeant les erreurs commises par Brantôme dans le <Discours sur la reyne de France et de Navarre, Marguerite>. Notre article a pour but d'éclaircir cette image que s'impose elle-même.